



図1 軽石を含む凝灰岩層の露頭

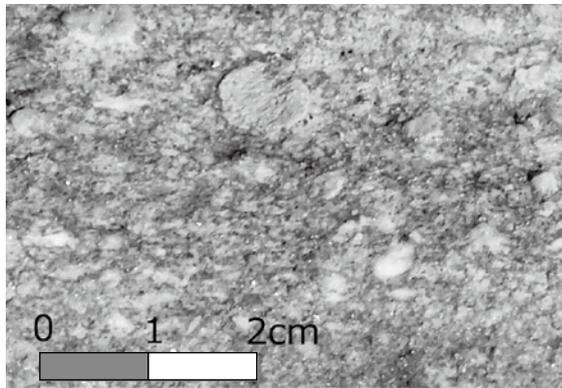


図2 軽石

判明！佐久島の地層の堆積年代

佐久島は、貝やウニなどの化石を含む堆積岩でできています。佐久島と同じ時代の同じ海に堆積した地層と考えられているのが、知多半島南部と日間賀島に分布する師崎層群です。

知多半島南部や日間賀島の地層と佐久島の地層は、いずれも砂岩・泥岩・凝灰岩などで構成されていて、見た目もよく似ています。知多半島南部や日間賀島、佐久島の地層がひとつづきの海に堆積したと考えられている根拠の一つです。岩相の特徴から四つに分けられており、下位の地層ほど火山灰の混じった堆積岩が多くなります。

師崎層群の地質年代は、浮遊性有孔虫・放射虫・珪藻などの微生物の化石や貝類の化石をもとに推定されています。それによれば、新生代新第三紀中新世の地層で、一八〇〇万年前～一五〇〇万年前のものと考えられています。このようにして決めた地層の年代は、基準となる化石を含む地層よりも下にあるか(古い地層)、上にあるか(新しい地層)という相対的な決め方であることや、確実に地層の連続を確かめているわけではないので、相対年代といえます。

地層や岩石の年代の示し方には、このほかに、鉱物や天然のガラスに含まれる放射性物質から測定する放射年代があります。

放射年代測定では、具体的な数値が求められません。師崎層群では、小野浦北東と内海南東で採集した凝灰岩中のジルコンの結晶を用いて行われています。それによれば、前者で $16.1 \pm 1.9\text{Ma}$ 、後者が $15.9 \pm 1.4\text{Ma}$ ($1\text{Ma} = 100\text{万年}$)となっています。この値は、化石から推定された一八〇〇万年前～一五〇〇万年前の、若い方の年代とほぼ一致しています。この凝灰岩は、師崎層群のやや上部にあり、この年代値は、師崎層群の堆積期間の後半を示しているといえます。



図3 凝灰岩採集地

一方で、師崎層群が堆積を始めたころの放射年代はわかっていません。もしわかれば、化石から推定された地質年代との擦り合わせができることとなります。

私たちが平成28年12月に実施した佐久島の調査で、佐久島漁港(西港)周辺(図3)で凝灰岩層を見つけた。軽石(図2)を含む、厚さ2mほどの凝灰岩層で(図1)、ルーペで確認したところ、凝灰岩の主な構成物である火山ガラスが確認できました。これは、風化の程度が弱いことを示しており、火山から噴出後、あまり流水の影響を受けていない可能性が高いと考えられました。また、領家変成

岩類や深成岩類が風化してできた砂があまり混ざっていないこともわかり、放射年代を測定する試料として適していると思われました。さらに、師崎層群が堆積をはじめた時期を知るための試料としても適切だと判断しました。それは次のように考えられるからです。師崎層群の地層は、知多半島南端の師崎付近に露出するものがいちばん下位(古いもの)で、北西方向に向かって新しい地層が重なっています。師崎の南東にある日間賀島や佐久島に分布する師崎層群の地層は、師崎付近の地層より下位の古い地層であるということになります。つまり、佐久島の地層は、師崎層群が堆積を始めたころのものと考えられるわけです。

平成29年12月に軽石凝灰岩の採集を行いました。採集試料は(株)京都フィッショントラックに送り、放射年代測定試料としての適性を調べました。その結果、ジルコンという鉱物(図4)の結晶が大量に含まれていて、状態も適正であることがわかりました。同社に年代測定を依頼し、ジルコンフィッショントラック法(ジルコンFT法)とウラン鉛法(U-Pb法)の二つの方法で放射年

代が求められました。測定法を簡単に説明すれば次のようです。

ジルコンFT法

ジルコン中に含まれるウランが核分裂を起こすと、ジルコンの結晶中に傷あとが残ります。古いジルコンほど核分裂が進み傷あとが増えるので、傷あとの密度の変化をもとに、鉱物が形成されてからの時間を求めることができます。このようにして得られた年代値をフィッショントラック年代(FT年代)といいます。

ウラン鉛法(U-Pb法)

ウランは放射線を出しながら、一定の時間経過で、鉛などの別の物質に変わります。岩石に含まれるウランなどの放射性物質とそれが変化してできる別の物質の比率を調べることにより、岩石ができた年代を定めることができます。これをウラン鉛法といいます。今回はジルコンに含まれるウランで測定をしました。

測定結果

FT法による年代 17.8±1.3Ma
U-Pb法による年代 17.9±0.1Ma
二つの方法で得られた放射年代



図4 測定に使用したジルコンの一つ

は、化石で推定された師崎層群の堆積期間である一八〇〇万年前〜一五〇〇万年前という値と整合性が認められるだけではなく、師崎層群下部の地層の値としても合致するものです。これをもって、師崎層群の堆積開始時期が判明したといえるかどうかは、基盤岩である領家変成岩・深成岩類との不整合面を見出す必要があります。年代測定の詳細については、『新編西尾市史研究第5号』でもお知らせします。

自然部会

執筆員 内田 義和
※調査員 吉村 暁夫
調査員 山本 康孝
※執筆者

こちら
現代部会です。

近・現代部会 編集委員

宇佐見 正史

近・現代部会は、二〇二三年度に資料編、二〇二五年度に通史編1、二〇二七年度に通史編2を刊行する予定で、まずは資料編の完成に向けて鋭意準備を進めています。

これまで多くの自治体史が太平洋戦争の降伏受諾（一九四五年八月）前後によって近代と現代を区分して部会を設け、それぞれ近代編と現代編を刊行していたのに対して、新編西尾市史では、近・現代部会が明治時代の初めから平成の町村合併による新西尾市の成立に至る約一四〇年間を一貫して担当することになっていきます。

現在の日本の近現代史研究では、太平洋戦争の敗戦を区切りに截然と時代を区分するのではなく、戦前・戦時・戦後を通じた歴史の変化を、近代社会から現代社会への移行の過程として把握することが重視されています。こうした研究の潮流からみて、一つの部会が西尾市域の

近代・現代史を描ききることは誠に時宜を得たものと言えます。近・現代部会は、歴史研究の最新成果を踏まえて、約一四〇年間にわたる西尾市域の人びとの営みを叙述することを目標にしています。

ところで、一色町・幡豆町・吉良町との合併を経た現在の西尾市域は、ほぼ旧幡豆郡の領域に相当しており、昭和・平成の町村合併を経て、旧幡豆郡から豊坂村が離脱し（額田郡幸田町へ合併）、旧碧海郡明治村大字米津・南中根が加わるということになり、現市域が構成されていることとなります。したがって、新編西尾市史の編さんは、新しい幡豆郡史をつくるという意味も持っています。

とはいえ一口に幡豆郡と言っても、郡内の町村は多様性に富んでいますが、面積などの地勢や自然条件はもとより、大正時代を例に戸数・人口をみると、図のように町村によって大きな違いがあります。戸数のほとんどが農家である福地村・三和村・室場組合村（室場村・花明村・家武村・平原村の連合）、対照的に商工業戸数が多く、農家が戸数の四〇五割程度でしかない西尾町・平坂町というような（『大正十三年調 愛知県

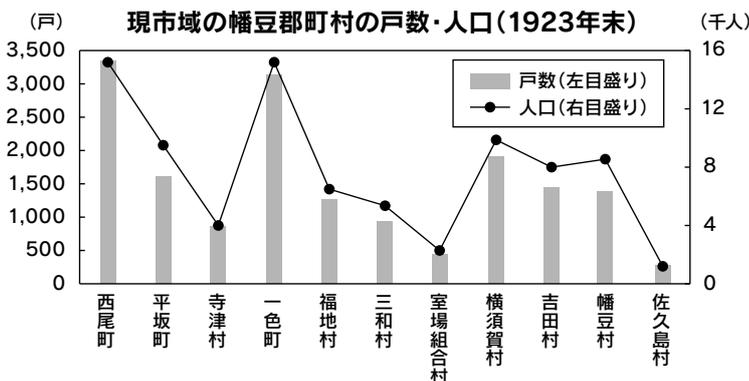
幡豆郡勢一班』）、各町村の特性を考慮しながら市史の構成や叙述方法を工夫することが求められています。近・現代部会は、市域となっている旧町村の地域的特性に十分に目配りしながら編さんを進めていきたいと考えています。

さて、自治体史の編さんには、すでに収集された資料の整理・活用だけでなく、新たな資料の渉獵・発掘・整理・活用が不可欠です。このため近・現代部会は、行政文書をはじめ企業・団体・学校・個人等が所蔵する資料を、西尾市内はもとより県内、あるいは全国的に可能な限り調査・収集することを追求していきます。その際、明治・大正時代の愛知県庁文書（国文学研究資料館・徳川林政史研究所蔵）や、市域を経由した西尾鉄道・三河鉄道・碧海電気鉄道といった私鉄の関係資料（国立公文書館所蔵の鉄道院・鉄道省文書）など、東京に所在の資料の調査・収集も欠かせません。

また、地域の歴史を知るためには、『新愛知』（現『中日新聞』）などの地方新聞の市域に関連する記事も重要な資料となりますが、こちらの収集はすでに調査員によって相当な

作業が進められています。

現在は、自治体史の編さん事業が、成果となった刊行物の内容はもとより、収集した資料の保存・公開体制が整備されているかどうかを含めて評価される時代になっています。編集委員会の一員として、市史編さんの過程で収集した資料が幅広く活用され、近隣の自治体史編さんや地域史研究に役立ててもらおうことを心から願っています。



出典：幡豆郡役所『大正十三年調 愛知県幡豆郡勢一班』より作成。

調査報告

二つの城館跡の位置が判明

市史編さん室長

石川 浩治

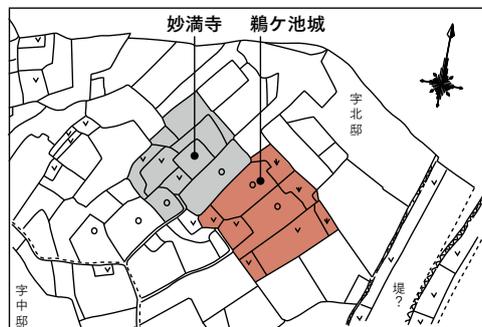
新編西尾市史の編さんでは、考古部会執筆員の奥田敏春氏を中心に中世城館の調査を行っています。市内には約60もの中世城館がありましたが、東条城や寺部城、室城のように丘陵上に築かれたものを除き、多くが平地に築かれていたため、廃城後は堀や土塁が破壊されて現在その姿を留めるものは少なく、『三河国二葉松』などの江戸期の地誌にその名が知られるだけで、位置さえもわからなくなっている城館もあります。そうした城館を調べるには、明治期に作られた地籍図の調査や地元での聞き取り調査、実地調査、発掘調査などの方法があります。今回はそうした調査によって新たに位置が判明した鶴ヶ池城と巨海城の事例を紹介します。

鶴ヶ池城は、西尾市鶴ヶ池町地内にありましたが、位置や構造は明確ではありませんでした。『西尾私史』によると城主の富永忠安は吉良氏の家臣で、新城市の野田村の館から永祿七(一五六四)年に鶴ヶ池城に隠居

し、翌年徳川家康から寺を建てる土地と寺領を安堵されて妙満寺を建てたと伝えられています。

今回、地籍図や現地調査によって鶴ヶ池町上屋敷地内で鶴ヶ池城の位置が判明しました。地籍図によると鶴ヶ池城は約60m四方の方形居館で、同地には現在も富永氏のご子孫がお住まいで、隣に旧地名「妙満寺」が伝えられています。妙満寺は富永氏の菩提寺で現在は大給町に移転していますが、鶴ヶ池城と菩提寺が並列する構造であることがわかりました。地籍図を見ると鶴ヶ池城と妙満寺にそれぞれ通じる道があり、城と寺が並列な関係であったことがわかります。

鶴ヶ池城は吉良氏滅亡後に富永氏が隠居した城のように思われていますが、菩提寺と居館が並び立つ構造は寺津城等吉良氏の家臣にみられる構造で、鶴ヶ池城はただの隠居屋敷ではなく、それ以前からの富永一族の拠点のひとつであった可能性も考えられます。富永氏は室城(西尾市室町)が本拠地とされていますが、他にも岡山城(吉良町岡山)も支配しており、富永一族は、室城、鶴ヶ池城、岡山城という複数の城館を支配下に置き、幡豆郡域の一部を支配する一族として考え直す必要があります。



明治17年地籍図 鶴ヶ池城跡周辺 S=1/1500

巨海城は『三河国二葉松』に城主が巨海新左衛門と伝えられるのみで、場所については寺津中学校校庭南の台地の端の枯木宮と言われる場所と推定されていました。今回、地籍図の調査で寺津小学校の南の長寿尼寺跡付近に90m四方の区画を確認し、巨海城の跡と推定しました。巨海城推定地の現状は畑地で、周囲には敷地目の細長い区画が巡っています。これは、堀又は土塁の痕跡と思われる。注目すべきはその形状で、南側は方形ですが、北側は円形になっており、軍事的な改修が行われたことを示唆します。付近の発掘調査では15〜16世紀の住居跡や鉄滓などの遺物が出ています。城主の巨海氏は吉良氏の家臣であり、巨

海城の付近には永正五(二五〇八)年巨海勘解由尉秀国の棟札がある八劍神社や吉良氏縁の願成寺や長寿尼寺があり、巨海城を中心とした集落が営まれていました。今後城跡の発掘調査の機会があれば更に詳しいことが判明するでしょう。

中世の史料は残されている文書が少ないのですが、城館の構造を調査することで文献史料には表れない地域史の資料として活用できるのではないのでしょうか。

今回紹介した鶴ヶ池城や巨海城の調査成果は、来年度春に販売する『新編西尾市史 資料編1 考古』に掲載されますので、是非お買い求めください。



明治17年地籍図 巨海城跡周辺 S=1/1500

主な活動記録

(平成30年4月～31年1月現在)

編さん委員会
4月25日

編集委員会
5月7日・1月21日

考古部会

「資料編1 考古」の執筆・編集作業

調査

- 5月 梶島(吉良町) 矢穴石調査
- 5月 市内石塔調査
- 7月 市内出土人骨調査
- 7月 鳥羽神宮寺跡(鳥羽町) 測量調査
- 9月 岡島遺跡出土品調査
- 11月 絵図調査(豊橋市美術館)



梶島での矢穴石調査のようす

古代・中世部会

部会

4月21日(中世)・8月18日(中世)・11月24日(中世)

調査

- 5月1～3日 広島大学附属中央図書館・文学部日本史学研究室
- 9月25日 豊田市郷土資料館
- 10月3日 石水博物館(三重県)
- 4月～ 東京大学史料編纂所

近世部会

部会

4月21日・8月2日・11月23日

調査

10月20日 国文学研究資料館(東京都)
10月21日 都立中央図書館(東京都)

寄託・寄贈文書整理

4月～12月 のべ26回 小崎家文書(矢島貞廉旧蔵)、滝家文書(法応寺旧蔵)、正顕寺文書ほか

翻刻

4月～12月 田代家文書(馬場町)・鈴木家文書(吉良町寺嶋)ほか

近・現代部会

部会

6月16日・12月2日

調査

- 5月30日 製塩業・海苔養殖業聞き取り調査
- 8月21日 国立公文書館(東京都)
- 10月7日 一色町漁業聞き取り調査
- 11月26日 疎開体験者聞き取り調査(岩倉市)
- 4月～12月 寄託・寄贈文書整理・調査
のべ43回 神谷和正氏収集資料・中畑町杉浦家文書・中町烏山利平家文書・鳥羽町倉地家文書・近代町村史・吉良町専売局資料ほか

近代新聞(『新愛知』)調査 名古屋市鶴舞中央図書館

4月～12月 のべ81回

自然部会

●部会

6月27日

市内の地質・植物・動物(哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類・魚類・軟体動物・昆虫・蜘蛛など)

●調査

4月 のべ14回
5月 のべ19回
6月 のべ24回
7月 のべ14回
8月 のべ33回
9月 のべ20回
10月 のべ26回
11月 のべ21回
12月 のべ15回

美術工芸・建造物部会

●調査

10月20日

5月17日 堯雲寺(吉良町岡山) 予備調査
5月20日 明正寺(西幡豆町)・浄教寺
(平坂町) 彫刻

5月25日 旧一色町役場庁舎・西奥田新田
樋門と伊勢湾台風復興住宅 建造物

6月15日 康全寺(満全町)・東禅寺(小島町) 絵画

民俗部会

●部会

6月2日・9月8日・12月8日

●調査

・新村町・西浅井町の御田扇祭り
・西尾祇園祭(中町大屋形・肴町大名行列・天王町神楽獅子)

・米津町米津神社の舞台方
・西尾・吉良の製茶業と茶のある暮らし

・一色の大提灯祭り・龍神祭り
・瀬門神社・中畑八幡社の馬掛け神事
・海岸部の漁業・養鰻業・製塩業・ノリ養殖業・海運業など

・秋葉信仰の広がりの実態
・岡島町鍛神明宮の御蔭祭り

6月29日

田貫町神明社 建造物

7月7日

満国寺(一色町味浜) 絵画

7月13日

巖西寺(今川町)・大通院(吉良町寺嶋) 絵画

7月31日

県立西尾高等学校 建造物

9月10日

善福寺(中町)・真正寺(吉良町富好新田) 彫刻

12月12日

宝光院(吉良町駿馬) 予備調査

12月15日

東向寺(駒場町) 彫刻

12月19日

妙安寺(上永良町) 彫刻

1月27日・28日

実相寺(上町) 彫刻・工芸



ムシロ織り機による実演

調査にご協力いただいた皆さま、
情報をお寄せいただいた方々へ
心より感謝を申し上げます。

・お日待ちと庚申講
・平坂・米津・寺津・中畑・福地地区の暮らしと生業
・ムシロ織りとカマス作り技術
その他、市内の祭礼調査や聞き取り調査等
4月～12月 のべ226回

特別講座「市史編さんの現場からⅢ」

日時 平成30年12月9日(日)
会場 西尾市岩瀬文庫 地階研修ホール

- ① 「海の古代寺院―寺部堂前遺跡(寺部廃寺)出土の型押簾状文軒平瓦を中心に―」
永井邦仁氏(愛知県埋蔵文化財センター調査研究主任/考古部会調査員)
- ② 「西尾市の地形・地質探偵団(基盤岩類の謎と佐久島の地層のミステリー)」
内田義和氏(岡崎学園高等学校副校長/自然部会執筆員)、山本康孝氏(同調査員)、吉村暁夫氏(同調査員)



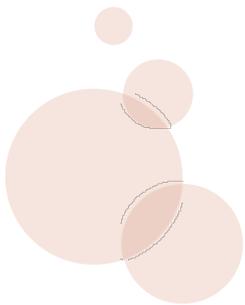
講演会のようす

本年度も、市史編さんの成果を市民にご紹介する講演会を開催しました。

最初は、考古部会調査員で古代瓦を専門とする永井邦仁氏が、西尾市寺部町にある寺部堂前遺跡とその出土瓦について解説しました。この遺跡は、三河湾に面し、「寺部廃寺」と呼ばれてきました。瓦は八世紀初頭以降とみられ、軒丸瓦の「型押簾状文」と呼ばれる文様は、東三河地方や三重県桑名市、静岡県浜松市の出土瓦にも見られるもので、海路を介した技術交流がうかがえます。また、遺跡からは中世陶器も出土しており、北側にある幡豆小笠原氏の居城であった寺部城跡との関係も伺われます。

次に、自然部会の地形・地質班より、これまでの調査成果を中心に発表がありました。内田氏からは西尾市の地形と地質の概要について、山本氏からは基盤岩類の変成、特に深成岩類について、吉村氏からは今年度を実施した佐久島の地層の放射性絶対年代測定の結果について解説しました(この詳細については、1〜2ページをご覧ください)。

永井氏および地形・地質班の三氏にご講演いただいた内容については、『新編西尾市史研究』第四号(既刊)にも掲載されており、佐久島の地層の年代測定についての詳細は、四月上旬刊行予定の同第五号に掲載予定です(ぜひご購入ください)。



右より内田義和氏、山本康孝氏、吉村暁夫氏



永井邦仁氏



刊行物のぐい案内

刊行予定

『新編西尾市史研究』第五号

A4判 平成三十一年四月上旬刊行予定

ただいま編集集中!

市史編さんの過程の調査・研究の成果をいち早くご紹介します。

(内容) 「吉良義信と吉良義元」
 「一九一〇〜三〇年代の町村誌における郷土意識―愛知県幡豆郡の事例」 「江戸前期に成立した二本の三河吉良氏の系図について」 「三河湾のウミウシについて」 「佐久島の地層の放射性絶対年代」 「稲・藁・吹―イネ・ワラ・カマス―」 「昭和三十〜四十年代「葦の文化会」活動の軌跡」 「豊橋市美術博物館寄託 大河内文書「寺津古城之図」について」 (予定)

既刊 『新編西尾市史研究』第四号

A4判 120頁 700円

既刊 『新編西尾市史研究』第三号

A4判 110頁 700円

既刊 『新編西尾市史研究』第二号

A4判 76頁 500円

いずれも岩瀬文庫休憩室で販売中

新編西尾市史年次別刊行計画

新編西尾市史では通史編(本編)5巻、資料編5巻、別編4巻の合計14巻を発刊予定です。

年度	通史編	資料編	別編	計
2018		1 考古		1
2019		2 古代・中世		1
2020		3 近世1		1
2021	1 原始・古代・中世			1
2022		4 近世2	1 美術工芸・建造物	2
2023		5 近現代	2 自然	2
2024	2 近世1			1
2025	4 近代1		3 民俗	2
2026	3 近世2			1
2027	5 近代2・現代			1
2028			4 年表・索引	1
計	5	5	4	14

資料や情報をお待ちしています。

西尾の歴史や文化、風土に関する資料がありましたら、お知らせください。今後の市史編さん活動に役立てます。

- ・古文書や古い日記など
- ・戦前の市内で刊行された雑誌

自然調査にご協力ください。

(1) 市内のヒキガエル・イモリ・タケクマバチ・セアカゴケグモ・フクロウ・アオバズク・化石などに関する情報を集めていきます。詳細は市ホームページをご覧ください。(https://www.city.nishio.aichi.jp/index.cfm/8,50452,91,674.html)

(2) 魚類について川、海を問わず珍しいものを見かけた場合は市史執筆員が所属する碧南海浜水族館(〇五六六―四八―三七六一)まで情報をお寄せください。



担当・お問い合わせ

西尾市教育委員会文化振興課 市史編さん室
 〒445-0847 西尾市亀沢町480
 西尾市岩瀬文庫内

TEL 0563-56-6660

FAX 0563-56-2787

E-mail shishi@city.nishio.lg.jp